

# 樹病ウォッチング

秋 本 正 信

植物の病気はカビの仲間によるものが多い。カビは、ふつう死んだ物から養分を取って生活している。ところが、中には生きた植物からも養分を取れる、特殊な能力を持ったカビがいる。これが植物病原菌である。植物と病原菌の目に見えない戦いは、植物の「病気」という形で人目に触れる。私達の身近には植物の病気がたくさんあるが、そのつもりで見ないと意外と気付かないことが多い。ここでは、誰でも見分けられる身近な樹木の病気を紹介する。

## キハダのさび病

昨年、夏の夏から秋にかけて道北各地では例年になくこの病気の発生が目立った。山では、稚樹から成木に至るまで、キハダは必ずといっていいほど、「さび病」にかかっていた。ほかの広葉樹がまだ青々している9月始め、罹病木の樹冠の一部が褐色し、すでに落葉が始まっているので、遠くからでもすぐわかった。こういえば思い当たる人も多いのではないだろうか。

葉の表面に斑点状の黄変が現れて、初めてこの病気に気付くことが多い。葉裏を見ると、粉っぽいオレンジ色の塊（病原菌の胞子）が点々と付着しているので、診断はやさしい（写真－1）。罹病葉は褐変して縮れ、早期に落葉する。

さび病菌はその生活史を完成するのに、寄主の交替を必要とするものが多い。この場合は、キハダの葉に形成された胞子がアカマツ、クロマツ、ヨーロッパアカマツなどの二葉松に感染し、春先これらのマツ類に「葉さび病」をおこす。マツ類の針葉に形成された胞子は、再びキハダに感染して「さび病」をおこす。このように、キハダさび病菌はキハダとマツ類の間を往来する。

昨年、興部町ではヨーロッパアカマツに「葉さび病」の発生が目立ったという。今年は、他の地域でもマツ類の「葉さび病」が人目を引くかもしれない。



写真－1 キハダさび病（葉裏）

## サクラ類の胴枯病

春、正常に開花、開葉したサクラの幹や枝が、やがて急にしおれ、褐変葉をたくさんつけたまま枯れているのに気付いたことがあるだろうか。こうした木の幹や枝の枯れた部分と、健全部の境界を観察すると、樹皮に2～3mmの隆起がたくさん見える。このような場合は、まず「胴枯病」と考えていい。

隆起部の樹皮はやがて横に裂け、割れ目から病原菌の黒い菌体が見えてくる。「巻き枯らし」にならない時は、患部が少しくぼむ（写真－2）。

患部からヤニが分泌される場合も多い。北海道で、公園や並木のサクラが枯損したり、太い枝が枯れたりするのはサクラの種類にかかわらずこの病気によることが多い。



写真－2 エゾヤマザクラ 胴枯病

## カンバ類の褐斑病

林道を歩いていると、道路わきにダケカンバがたくさん更新しているのをよく見かける。夏、これらのダケカンバを見ると、葉に褐色の斑点がたくさんついていることがある。これが「褐斑病」である。

初め、葉に小さな褐点が散在して現れ、やがて病斑の数や大きさが増す。個々の病斑の大きさは1mm位であるが、いくつか融合して、不整形の5mm位の病斑を作ることもある。褐変部をルーペで見ると、ごく小さな黒っぽい隆起（病原菌の菌体）がかりうじて見える。

この病気は始め下葉に発生し、その後上方に広がっていく傾向がある。秋になると罹病葉は、縮れて早期に落葉する。「褐斑病」の発生は稚樹に目立ち、成木ではあまり見かけない。なお、ダケカンバのほか、シラカンバ、ウダイカンバにも発生する。



写真－3 ダケカンバ 褐斑病

（道北支場）